

田中 功介 さん

自分の歌声で

みんなを元気にしたい。

音楽が好き。歌手を目指して東京へ

小学生から高校卒業までピアノ教室に通った。音楽をしていて嫌になったことはないという。高校では部活動はしていなかったが文化祭で友達とステージで歌うことが楽しかったと振り返る。

高校卒業時の進路選択は、看護師だった姉の影響もあり、働きながら看護師の資格を取得できる総合病院の採用試験を受けた。しかし、結果は不合格。振り返ればこれが一つ目の転機となる。合格であるかどうか、何をしたいのかをしっかりと考えるきっかけとなった。落ちたことは不運だったかもしれないが、人生の選択としては幸運だった。「奄美を出たい」という思いは変わらず、好きな音楽で勝負してみようという決意し、東京で音楽を学ぶ道を選んだ。

「好き」だから続けられた

進学を決意し上京したものの、暇を持て余す生活では一切なかった。2年間の学費は350万円を超え、その学費は「新聞奨学生」で賄った。週2日の休みはあるとは言え、毎朝2時から日が昇るまでに300件、授業が終わればすぐに夕刊の配達の日課だった。夢は違えど同じように好きなことを追いかけている仲間がいたこと、日中の授業が「好き」に溢れていたことが、2年間休まず続けられた理由と振り返る。

アルバイトをしながら模索する日々

専門学校卒業後は、仲間とデモCDを作り、クラブやイベントの主催者に売り込み、限られたチャンスのライブ出演で経験を積み、夢を追いつけた。ライブだけでは安定した生活はできず、ホームセンターの配送や組立を行うアルバイトで生活を支えた。やると決めたらとことんやるのが信条で「今、振り返るとよくやっていた」と語るその労働条件は、ブラックそのもの。上司の計らいで、給与はアルバイトとしては破格の金額が懐に入り「安定」はしていたが、その「お金の安定」が「心と身体」をダメにしていた。

「お前は何をしに『奄美大島』から出てきたんだ」

毎日の睡眠時間は4時間。生活がアルバイト中心になっていった。強制されていたのではない。気づけば生活費のためのアルバイトに「やりがい」が生まれていた。しかし、本業のライブ活動は下火になっていった。嫌になったわけではない。工夫を凝らす活力を奪われてしまっていた。

そんな時、3つ上の社員として働く先輩に、ふと言われた。「お前は、何しに『奄美大島』から出てきたんだ？」その言葉で我に返った。

新聞奨学生とアルバイトの生活を含めた約6年間の生活は、身も心もボロボロにしていた。アルバイトも音楽活動も一回りセッショしようと思いつき、25歳のときに奄美大島に帰ってきた。

先輩からの一言が、二つ目の転機。あの時、先輩の一言がなかったら、今はどこで何をしていたのだろうか。

「ウクレレの音色」が心を元気にしてくれた

ボロボロの身体の回復には時間がかかった。「うつ」のような状態が続く、何もかもやる気が起きなかった。そんな時のこと、ふと入ったお店で食事していると心地良い「ウクレレの音色」が耳に入ってきた。疲れた身体でも、染み付いた「音楽」に対する「愛」は、気付けば鼻歌を口ずさみ、歌い始めさせていた。東京で学んでいた作詞と作曲のスキルが呼び戻ってきた瞬間だった。その後、音楽活動を再開し、好きな音楽を楽しめるようになっていった。

島で音楽と生活の両立をしていくためには

理想と現実の差は誰もが経験するだろう。これから島を出る若人も然り。東京ではそれなりの稼ぎがあったことが邪魔をしたかもしれないが、島に帰ってきたからは、職を転々とし、好きな音楽を心置きなく楽しみながら生活していくためには、どうすればいいのかわからない日々が続いた。

仕事を転々としながら、島内で鋼材や医療用酸素ボンベなどを扱う会社に就職した時のことである。そこで在宅医療向けの酸素ボンベを配達したときの出来事が、新しい「生き方」を示し、三つ目の人生の転機となった。

身をもって感じたジェネレーションギャップ

35歳から奄美看護福祉専門学校で看護師になるために勉強をスタートさせた。

そこで感じたことは、学生の「態度」の違い。15歳以上離れた学生たちの姿に憤りを感じる日々だった。自分が学生のころ、新聞奨学生で学費を稼ぎながら必死に夢を追いかけていた当時の自分の姿と比べてしまい、目的意識のないように見えるクラスメイトの姿に嫌気が差した。ある時には、朝礼の前にマイクを握り、クラスメイトに向け話もした。その当時の学生からは「うざい大人」としか思われていなかったかもしれない。ただそれは、島の先輩としての「思いやり」からくる行動。「20歳まで島でぬくぬく過ごして、この子たちは本当に大丈夫なんだろうか」心配の裏返しでもあった。

好きなものはいくつあってもいい。
好きなものが好きでいられれば、それでいい。

いろんな紆余曲折を経ながら島に戻り、いくつもの葛藤を乗り越えて今の仕事に巡り合えた。現在は、島内の病院で看護師としての経験を積む日々だが、将来は「訪問看護師」として患者様に寄り添い、「自分の歌で笑顔を届けたい」と明るく話す姿が印象的で、好きな音楽を「自分らしく」表現できている生活が充実しているという。

今があるのは、「好きなものを好きのままでいられたから。」後輩たちには「好き」をたくさん見つけて「好き」を大切に生活を送ってほしいと語るその目は、強く、優しく澄んでいた。

たなか 功介 さん
小浜町生まれ。2001年 情報処理科卒業。
高校卒業後は東京の歌手を育成する専門学校に進学。東京で歌手を目指すも25歳で奄美大島に戻る。現在は看護師として働きながら「ゴスペルボーカルグループ『アマゴス』」の一員として島内で音楽活動を行う。NHK「のど自慢チャンピオン大会2022」で優秀賞を獲得。